

日本二十六聖人記念館

公園・記念碑・記念館・教会を併設するこの複合施設は、長崎を見下ろす西坂の丘に建てられています。ここは、キリシタンへの迫害が始まりつつあった 1597 年 2 月 5 日、日本を統治していた豊臣秀吉の命により、26 人のカトリック信者が処刑された場所です。この 26 人の殉教者は 1862 年に列聖されました。イエズス会によって管理されているこの複合施設は、その列聖 100 周年を記念して 1962 年に開かれました。

殉教者の像

公園に設置された巨大な高浮き彫りのブロンズレリーフは、30 代後半にカトリックに改宗した彫刻家、舟越保武（1912-2002）によって制作された等身大の二十六聖人像です。（そのうち最も小さい 3 人は、処刑当時 12 歳から 14 歳の子どもでした。）上部に刻まれているラテン語は、殉教者たちが死ぬ間際に唱えたと言われる「Laudate Dominum Omnes Gentes（すべての人々は神を讃えよ）」という言葉で、その下のたくさんの十字架は殉教者たちが磔刑に処されたことを表しています。この記念碑は大浦天主堂に向けて設置されています。過去には 1981 年の教皇ヨハネ＝パウロ 2 世、1982 年のマザー・テレサ、2019 年の教皇フランシスコといった要人がこの記念碑を訪れました。殉教者には、日本人信徒の他にスペイン人 4 人、メキシコ人 1 人、ポルトガル人 1 人が含まれていました。複数の国の信徒が亡くなったこの場所は、カトリック教会にとって特別な意味を持っています。

風変わりな建築

記念館と教会は両方、同じくカトリックに改宗した建築家、今井兼次（1895-1987）の設計です。若い頃にスペインを旅した今井は、カタルーニャ出身のモダニズム建築家、アントニ・ガウディの作品に深い感銘を受けました。ガウディの影響は、カラフルな陶製のタイルでモザイクが施され、有機的な形をしたサグラダ・ファミリアを彷彿とさせる聖フィリッポ教会の双塔や、食器の破片を使ったカラフルなモザイクの背景に白い不死鳥が描かれた記念館の西壁に見ることができます。

記念館の外観には、何重もの意味が込められています。最下部の白いモルタルで固められた石垣は、マカオから輸入されたモルタルが使われた長崎の寺町の石壁を思わせるデザインです（マカオはイエズス会の重要な拠点でした。）その上の部分は処刑場を取り囲んでいた「竹矢来」をモチーフにしています。上の二層は、牢獄を連想させる縦格子です。太めの格子の間にあるカラータイルの模様は上部が赤くなっており、これは長崎の殉教者が磔にされた時に脇腹に刺された血まみれの槍を表しています。

貴重な資料が豊富な記念館

イエズス会によって運営されているこの記念館には、400 年以上前のものを含む非常に歴史的価値の高い品々が収蔵されています。とりわけ貴重な展示品には、聖フランシスコ・ザビエルが 1546 年にポルトガル国王ジョアン 3 世に宛てて書いた手紙の原本、天正遣欧使節の一員として 1582 年にローマに渡り、帰国後司祭となった中浦ジュリアンが 1621 年に日本人キリシタンに対する迫害についてイエズス会の先輩宛に書き送った手紙の原本、そして、1600 年から 1614 年の間に長崎で描かれたと考えられている「雪のサ

ンタマリア」と呼ばれる聖母マリアの絵などがあります。また、数多くの古地図や日本人キリシタンが処刑される様子を描いた生々しい挿絵入りの古書、カトリック宣教師の帰還を報じた 19 世紀後半の新聞も展示されています。

教皇ピウス 12 世は 1950 年に西坂を公式のカトリック巡礼地に認定しました。記念館では、殉教者の 1 人の血で染まった絹の布片や、26 聖人に含まれる日本人司祭、聖パウロ三木・聖ヤコブ喜斎・聖ヨハネ五島の遺骨といった、キリスト教徒にとって特に興味深い聖遺物も公開されています。

記念館の入り口のすぐ外にある小さな像は、1637 年にこの地で処刑された聖ロレンソ・ルイスです。彼は最初のフィリピン人殉教者であり、最初のフィリピン人聖人でもあります。